



「最後のはじめ」

副校長 池田 吉弘

新しい3学期制の3学期が始まって、約一ヶ月半（新しい3学期制では、冬休みの始まりから3学期と位置づけられています）が過ぎました。平成28年度も2月（逃げる）3月（去る）のみです。

さて、6年生にとっては小学校生活の締めくくりです。学校行事にしても日常的な教育活動にしても「小学校生活最後の」ということがよく言われます。そういう私もよく話題にするのですが…。小学校生活最後の移動教室が終わり、小学校生活最後の運動会……、そして、小学校生活最後の学校行事（卒業式）で集大成を迎えます。それぞれの心持ちはいかようなものでしょうか。

松尾芭蕉の「奥の細道」は「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」という序文から始まります。月日は永遠に終わることのない旅人のようなものであって、来ては去り、去っては新しくやってくる年もまた旅人である。という解釈がされています。

私たちの日常も一瞬たりとも止まることはありません。だからこそ、意識的に立ち止まり振り返る場が必要なのでしょうか。その意味では、小学校生活の中での「最後の」という言われ方は、特別な区切りと考えてもよいでしょう。現実には連綿と続いています。長い人生だからこそ、人には節目を設ける必要があるのでしょうか。しかし、区切りであってもゴール（終わり）ではなく、新たな始まりでもあるのです。順調な人には冷静に振り返ることが必要な場合もあり、不調な人には再起を賭けた勝負に出るきっかけなのかもしれません。また、ある人にとっては気持ちを切り替えて再スタートを切るきっかけにもなるでしょう。この節目は、完全に過去をリセットできるものではありません。過去の経験をこれからの人生にどう生かしていくかにかかっています。ポジティブシンキングでいきたいものです。

人生には何度も軽重様々な節目が訪れます。昨夏、熱狂していたオリンピックは4年ごと、小学校生活は6年間です。二十歳は、大人への分岐点です。人生の岐路に立たされたとき、自ら判断し自己責任において立ち向かうことが求められます。自分で自分の将来に責任をもって判断し、進んでいける力を身に付けなければなりません。その意味では、日常の悩みや後悔でさえも、回避できない将来に向けて必要な経験になるのではないのでしょうか。一つ一つ自分の力で乗り越えていくことが大切なのです。

このような大きな節目は、実は特別なものではなく、私たちにとって日常の一瞬一瞬の積み重ねに他なりません。節目ではないからといって、その時々を大事にしなくてよいことにはならないのです。来年がある、明日があると何でも先延ばしにして今を大切にしないでよいことにはなりません。今しかできないことが必ずあるはず。今しか感じられないこと、考えられないことがあるはず。無理をする必要はありませんが、結果のみにかかわらず、その時々目標をもって一生懸命に取り組むことが大切です。

そういった意味で3学期は、年度の締めくくりとして振り返りには絶好の時期です。この一年、自分の成長を感じることができたでしょうか。大会で優勝した等は、素晴らしいことですが、できなかったことができるようになった、忘れ物が減った、我慢できるようになった等々、日常の些細なことでも構いません。他人の評価がどうであれ、自分で実感できることが大切です。人から褒められること、認められることばかりが成長の目安ではないからです。自分で気付いていないだけで必ず成長しているはず。実感できてない人は、残り二ヶ月を意識してみてください。自分のことがもっと好きになると思います。

その瞬間瞬間（一期一会）の出来事や出会いの積み重ねを大切にすることが豊かな人生の素になるのかもしれない。

一期一会（いちごいちえ）：茶道に由来する日本のことわざ・四字熟語。茶会に臨む際には、その機会は二度と繰り返されることのない、一生に一度の出会いであるということを知り、亭主・客ともに互いに誠意を尽くす心構えを意味する。「一期」は仏教語で、人が生まれてから死ぬまでの間の意味。